

の間だから、まあ、不便を楽しもう、という気分になつてゐる。

郵便・宅急便は順調である。投稿歌等「心の花」関係の郵便は順調に届いている。メールが信用できないので、原稿や選歌なども、アナログ時代の昔のように速達で送つたりしている。

テレビは無い。以前はこの家にもテレビを置いていたが、見えがわるいの捨ててしまつた。スマホはOK。まったく不自由はない。

九〇年代、オランダから帰つて間もなく、書庫の本があふれてしまい本の置き場を思案していた。当時、二頭いた犬たちのために一時間ほどで行ける別荘をさがしていた。もちろん母や子供たちが気軽に行ける山の家を、とも思つていたところ、この家と出あつた。

東名高速で一時間半で来られる。バブル時代のスタジオだったとかで、部屋が大きく（三十畳弱の部屋が二つある）、吹き抜けになつていて天井が高い。その天井までびっしり本棚を作つて、本を大量に運び込んだ。と書くと、何もかもうまくいったようだが、じつさいには、あまり利用できなかつたような気がする。一家で來ても、忙しい時代で、せいぜい三泊ぐらいしかできなかつた。母は二回ぐらいたしかなかつたと思う。気軽に本を取りにくるつもりだつたが、実際にはそんな時間はめつたにとれなかつた。卒業論文や学年末のレポートを

持つて、真冬に一人でやつてきて零下の寒い中、一泊二泊したことなどが思い出である。

今回、二ヶ月余ここで過ごすが、そんなことは初めてである。

人は生涯に何軒ぐらいの家にかかわるのだろう。一生に一軒。生まれた家にそのまま生涯住む人も少なくない。一方、葛飾北斎のように九十回以上引っ越しをしたという人もいる。現在でも転勤の多い人ならば、二十二回、三十回、引っ越しを経験する人も少なくない。私の友人でも、海外を含めて二十回引っ越し経験をもつ者がいる。

農業、林業のように一つの土地と深くかかわりあうことが生活そのものだという人がいる。漁業はどうなのが。引っ越しせば、海や川あるいは湖がちがう。魚の種類や生態が違うだろう。生活のために、簡単には引っ越しはできないのだろう。

簡単に引っ越しのできない人もいる一方、その気があれば、いつでも引っ越し可能な人もいる。各地を巡り歩くことで生活していた昔の旅役者のように、いまでも世界をまたにかけて演奏旅行に明け暮れている人もいる。そんな人は、もし望めば、海外のどこにでも家を求めて引っ越すことは可能なはずだ。

金子兜太さんに『定住と漂泊』というエッセイ集があつた。定住するか、漂泊するか。家はその指標とみることができる。